琉球大学学術リポジトリ

ピアノ実技習得におけるアクティブ・ラーニングの試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上原, 由記音, Uehara, Yukine, Mori, Mayumi, 森, まゆみ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44005

ピアノ実技習得におけるアクティブ・ラーニングの試み

上原　由記音（本名：森　まゆみ）

An attempt to Introduce Active Learning into Piano Lessons

Yukine Uehara(Mayumi Mori)

はじめに

これは、2016 年 4 月から 2018 年 7 月までの琉球大学教育学部学校教育教員養成課程音楽教育専修のピアノ実技習得におけるアクティブ・ラーニングの試みの報告である。

まずは、アクティブ・ラーニングの重要性について、中央教育審議会の答申を確認する。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改訂にあたり（平成 28 年 12 月 21 日）、社会に開かれた教育課程の実現について下記のように説明している。

人工知能がいかに進化しようとも、それが行っているのは与えられた目的の中での処理である。一方で人間は、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出すことができる。（略）子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である。
そして、その学び方について、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」をあげ（平成 29 年 12 月 21 日中央教育審議会）、下記のように述べている。

教育方法に関するこれまでの議論においても、子供たちが主体的に学ぶことや、学級やグループの中で協働的に学ぶことの重要性は指摘されてきており、多くの実践も積み重ねられてきた（略）「アクティブ・ラーニング」を重視する流れは、こうした優れた実践を踏まえた成果である。

主体的・対話的で深い学びの実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）として「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習　内容を深く理解し、資質･能力を身に付け､生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること。

以上が高校生までの教育に関する中央教育審議会の答申である。

さて、ここで受動的な教授法が多く行われているピアノ実技学習法について論考を進めたい。なお、ここで述べるピアノの演奏実技は、即興演奏ではなく既に作曲されている楽曲の演奏をさす。また、今回の取り組みは筆者が大学教員であることから対象を大学生に絞っているが、本来、年齢に関係なく初めて学習を始める者すべてに、自ら学ぶことができるようにすることが理想であると考える。「どのように弾きたいのか、どのように弾くと良いのか」を自ら思考できるようになることはグレードや年齢に関係なく大切なことである。子供の場合、教員からの

サポートは学生や大人より多くなるが、教員の知識を押し付けるのではなく、自ら考えて選択し表現できるように導くことが大事である。「こう弾きなさい」と言い、真似させるのでは主体的な思考は生まれない。大学生だけにアクティブ・ラーニングが可能なのではなく、本来、グレードや年齢なりの自らの学びが必要であることを認識しながら論考する。

ピアノの演奏は善し悪しが可視化できないため、学習者が自分で判断することが難しく、そのためピアノ実技の学習は長い間、徒弟制度のような技の伝授の歴史が続いてきた。多くは教える側が、歴代の師匠からの教えをコピーのように代々伝授していくことになる。時には教員が「私の教えたように弾かなければ駄目だ」と強制し、また「他の音源は一切聴かないように」と指導したり、コンクールによっては模範音源の通りに弾くことを理想としているようなケースもある。

しかし演奏するとき、楽譜に書かれた情報、芸術の美学的な潮流や、作曲家の作風などの情報を深く理解して自分の考えをまとめ、作品に相応しい表現を工夫する。楽譜上に作曲家の理想が寸分の狂いなく表されることは不可能である為、そのゆえに色々な研究が必要になり、楽譜を深く読まなければならない。その作曲家がどのような歴史的背景をもち、作曲家自身の作風がどのように変化し、その作品が歴史的にも、彼の作曲家人生の中でも、どのような位置にあるのかを調べる必要がある。そして作品分析が重要になり、その分析から、キーワードになるフレーズがどのように展開されどのように終結するのかを理解し、どのように演奏すれば作品の持つ意味や魅力が引き出せるのか、そのためにどのような練習方法を行い実践できるのかを考え実行する。これらを教員が教えていくのではなく、学生自身の力で目標を達成させることが自らの学びである。楽譜を深読みし、作品分析を伴った上でも、それぞれの解釈には違いがうまれ、それゆえに楽譜から出来上がる音楽の姿は総て同じではない。コンクールや入学試験で審査が複数人数で行われることは、価値観が1つでないことを証明している。学習者は、「このように弾かなければ駄目だ」という言葉にひるむことなく、自ら学び、主体的に音楽を表現していくことが大事である。

授業の形態については、筆者はヨーロッパ留学中に音楽について意見交換の機会を多く持ち、多様な価値観に触れることができた自身の経験から、「対話的で深い学び」は1対1の子弟の間で行われるより、もっと複数人数で行われるほうが効果的であると考えた。「多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだす」（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成 28 年 12 月 21 日中央教育審議会））ことは、実体験から大変重要であると感じた。

以上の考えから、グループ活動による「主体的・対話的で深い学び」を行い、自ら考えて演奏することを目指すために、オリジナルの授業形態を始めることにした。

初年度の取り組み

2017 年に行われた一括入試での学校教育教員養成課程小学校教育コース音楽教育専修（以下、小専と記す）合格者は、音楽専門についての理論や実技演奏の審査なしの入試で受験していた。専門的知識の補充を試みたがそれでも楽典や聴音、実技といった専門の審査が行われた中学校教育コース教科教育専攻音楽教育専修（以下、中専と記す）での合格者との知識の差は多かったため、授業は小専と中専を分けて行うことにした。各クラスは 90 分 4 名とした。

小専と中専に共通して、まずは、自分たちで考えさせるための基礎知識として、授業開始前に筆者の琉球大学教育学部音楽科論集第 4 集紀要論文「ピアノ演奏への考察：重量奏法から感情尺度によるラベリングまで」を読ませ、レポートをまとめさせた。但し、あくまでも一教員の論考が唯一の理想と考えず、必ず他の論文を読

み、色々な知識を得るように指導した。論文の中から特に抜粋して、ピアノという楽器の構造、人体の骨格、筋肉の使い方と響きの関係性について関心を持たせるために、実際のピアノのダンパーモデルを見せて構造の理解をさせ、人間の身体の構造については、学生自身が実際に身体を使い、尺骨や橈骨といった骨の仕組みを知り、その使い方によって打鍵が変わること、投球や鞭打ちの脱力などの方法を実演し、その技がピアノ演奏に関わることなどを指導した。特に学生にとって今まで知らずにいた表現に必要な音の陰影を作る技術については丁寧な説明が必要であった。人が感情を込めて言葉を声にするとき、感情の種類によって強さや長さに微妙な変化がでる。それをピアノという楽器の構造と、人間の骨や関節、筋肉の役割を知り、どのように音として表現するために身体を使うのか、これをマスターさせるのは大変であった。そして、この内容について、納得のいく結果に結びつく技術習得のための工夫を、小専と中専に分かれて自分たちで考えさせ、またこの技術は長い期間をかけて習得するほどの難題であることから、遠い目標に向かって弛まぬ努力を持続させるというプログラム作りも、皆で考えさせた。このプログラムは音楽の学びに限らず、教育の現場の色々な側面で常に必要であるため、学生たちは真面目に取り組んだ。

次の段階でピアノの演奏に入り、学生たちには自分に欠けている事と自分の目標をそれぞれ考えさ、何を教材にしたら良いかを自分たちで考えさせた。勉強する楽曲を教員が指定してしまえば、学生たちは、調べ選択する作業をやらなくなるため、自分で調べたうえでの相談には応じると約束をした。

実技の授業を始めるにあたり、この授業においてルールを決めた。

①選曲は、時代、形式を偏りなくバランス良く選ぶ事、また、将来教員となる為の学習内容としてバランスの良い分量の物（作品の規模や難易度）を選ぶこと。

小専の学生は指の形と複音楽（ポリフォニー）について基礎を固めたいと意見が一致したため、学生と筆者で相談をして皆で同じ作品を勉強していくことに決めた。

中専は入学時点で既にピアノ習熟度が高い学生が多く、難易度の高いものがより彼らにとって魅力的な作品である場合が多い。これらの作品は完成させるまでに膨大な演習時間を必要とする為、学習のモチベーションは高まるものの完成まで到達出来ない事もある。希望と現実のせめぎ合いは、結果よりも経過観察を評価することとして、″やる気″が産み出す可能性を信じ、学生の主体性を重んじた。

②仲間の演奏に対して意見を述べるときに、個人的な印象を述べるのではなく、事前に相手の学習している作品についても情報を集め、それを裏付けにして客観的な意見を述べること。

自分が演奏するだけでなく、仲間の演奏曲目について分析し、色々な演奏家の録音を聴き情報を集めることにより、授業内で自分の感想を述べるのではなく、チキンとした裏付けを持って発言すること。この作業により仲間に的確なアドヴァイスができるようになることと同時に自分が弾いている作品だけでなく、広い知識を持つことができるというメリットがある。しかし、この課題が上手くいかないクラスもあった。これは別項で述べる。

③学生の演奏に対して教員はアドヴァイスするが、それに絶対的に従うのではなく、教員が述べた内容を１つの意見として受けとめ、主体的に別の意見と比較する姿勢が大事であると認識すること。

④模範演奏は、世界的に評価を受けているピアニストの演奏を選び、必ず複数の演奏を比較聴取すること。世界的に評価を受けているピアニストの抽出も各自工夫し、安易に教員に尋ねないこと。社会の中からどのような手段によって良いものの抽出をおこなうか、そのプロセスも大切である。但し、決して教員に質問をしてい

けないのではなく、自分で努力してから、質問をすること。

⑤自分の演奏を録音して、楽譜を見ながらアーティキュレーションや音のミスなどを自分自身でチェックし、出来れば動画を撮り、自分の姿勢や手の形もチェックする。これらを人に言われて気づくのではなく、自分の状態を自覚できる様にする。

⑥授業時間 90 分をどの様に使うか、各自の目標に向けてのプログラムの消化をどの様なローテーションで行うかなど、教室運営も学生主体で行う。これは自分が教員になった時に授業の時間配分、年間計画をするスキルを培う。

これらのルールに加えて、本学の URGCC（学士課程教育の質の保証を目的としたカリキュラム及び実施体制）に含まれるコミュニケーション・スキルも身につけられるように、次の項目も加えた。

⑦相手の良いところを褒め、次に改善点を述べる。その際にも、楽しい雰囲気を守る。正しい言葉で、文脈をきちんとさせ、明るくはっきりと話す。

以上は、学生たちに考えさせたことではなく、筆者が最初に決めたルールである。

自らの努力

学生は録音を撮る、音源を聴く、鏡を使うなどの工夫をし、自ら技術獲得のために基礎練習、作品の分析を行い、以前より自分で考えることが出来るようになったと述べている。また、次に述べられていないが、長いスタンスで目標に向かうために、カレンダーを使って努力の結果が可視化できる工夫をするなど、色々な努力をしていた。以下、学生のレポートより要約、抜粋で転載する。

「目をつぶって鍵盤の位置を手・指で覚えながらゆっくり演奏するという練習を行った。楽譜に集中して弾く練習も行った。

細かいアーティキュレーションがうまく表現できるように自分の演奏を練習時に録音し、客観的にどのように聴こえるのかを確かめる練習を行った。

自分が演奏する曲をピアニストが弾いている音源を探し聴いた。(R.A)」

「部分を抜きだし、リズム練習、片手練習、プレインベンションを通して、ブラインドタッチの訓練、スケールとアルペジオの練習、ポリフォニーの弾き方の工夫、黒鍵の使い方を工夫。基礎的な練習（指の強化、今までとは変わったリズムの取り方、脱力など）和声分析、右手の重心移動。「プレインベンション」は夏休みを使って、第 2 課程の全楽曲に取り組んだ。目標は、「指の強化（ハノン）」「体重の乗せ方」「楽曲分析」「曲の難易度を少しずつ上げる」「楽曲分析」強弱やテンポだけではなく、同じモチーフごとに比べるなどして今までよりさらに細かく曲と向き合い、自分の演奏とプロのピアニストの演奏の比較聴取。ピアニストの強弱を蛍光マーカーで楽譜に印を付けて演奏に繋げた。(S.N.)」

「指のアーチ型を体得することを目指した。この目標を達成するため、スケール、ハノンピアノ教本 1 ～ 5 を遅いテンポで自分の手、指を見ながら弾く練習を行った。私自身も表現を付けての演奏をするようになった。座る姿勢、椅子の高さ、ピアノと椅子の距離を工夫した。それに加えてピアノを弾くときに腕を動かすことを意識して練習した。調判定や、カデンツ、和声分析など自分が分かる範囲で分析を行っていった。(A.K.)」

学生の自己評価

「自分の伝えたい音楽を表現しやすくなった。自分以外の演奏に対してコメントを言うことで相手の気持ちを考えながら発言する力が身についた。自分の身に置き換えてみた時に厳しく指摘するような発言よりも自分自身を奮い立たせ

てくれるような発言のほうが、モチベーションが上がり次への意欲が生まれるということが分かった。相手の演奏の良いところを褒め、できていない部分に対して的確なアドバイスをすることを心がけた。この心がけにより、自分自身の発言する力が身についただけでなく、前期よりもグループメンバー間でのコメントに対する緊張がほどけ、レッスンがスムーズに進行するようになったとも考える。この発言を考えるうえで音楽についてこれまでより深く学んだため、音楽知識も増えた。一年間を通して由記音先生から頂いたアドバイスは多かったと考える。(R.A.)」

「自分の言葉で友人の演奏に対してコメントを言うことによって、自分の演奏の参考になったり、自分では気づかないことも他人の目から客観的に見ることによって気づくことが出来たり、先生との1対1のレッスンでは得ることが出来ない収穫を得ることが出来た。

上手な人の演奏を参考にして自分の演奏につなげるように努力した。

ショパンの「ワルツ第7番嬰ハ短調　Op.64-2」に挑戦し、Evgeny Kissin の演奏を参考にし、強弱やテンポの意味を自分なりに考えたり、黒鍵の使い方を工夫した。しかし、自分の理想の演奏を目指せば目指すほど、今の自分自身の実力の無さを実感し、基礎的な練習を行って実力をつけてから取り組むほうが良いという結論に達した。

71番は右手の重心移動、指の形にとても苦戦し自分の理想の演奏に近づくまでに1か月もかかったが、この曲に挑戦したおかげで自分の弱点をまた1つ発見することができた。

プレインベンションはみんなでスタートしたので楽譜も手元にあり、自分でも弾いてみたり出来たので、よりコメントしやすかった。

4人で一緒に楽曲分析を行い、強弱やテンポだけではなく、同じモチーフごとに比べるなどして今までよりさらに細かく曲と向き合い、自分の演奏とプロのピアニストの演奏と比べた。指の強化に取り組んでいる。椅子と鍵盤の距離によって体重のかけ方や腕の使い方を工夫した。「ツェルニー」は74番から77番まで自分で取り組み、グループのメンバーからアドヴァイスをもらった。他のメンバーの演奏から自分に足りないものを参考にする、また自分と同じ癖がある友人の演奏を見て他人の失敗から学ぶということもあった。(S.N.)」

「ツェルニー100番と曲を並行して取り組むようにした。上原先生のレポートを読んだり、手の動きをビデオに撮ったりした。自分の弾いているときと上原先生が弾いているときをビデオに撮って見比べた。後期の前半では4人で協力して3曲の分析をした。(M.T.)」

「「脱力」や「レガートさ」という点は練習する際に常に意識するようになった。また、世界的に有名な演奏家の音源を聞き、ここは硬めでここは柔らかい音で演奏しているといった表現の確認、演奏している姿のある映像を見つけたら手の形や肘と腕の動き、体の使い方を見るようになった。打鍵のスピードについて考えた。指の脱力を促すために取り組んだことは、アーチ型の手の形を作って演奏、肘を落とすことを意識する。(R.T)」

「相手にどのようにして自分の意見を伝えたらいいのか、言葉選びなどにも意識して取り組み、将来教員になって必要となる分かりやすい伝え方を学ぶことが出来た。授業運営で、授業の中での時間の配分をし、分からない所を自分たちで考える場を設ける等、とてもいい経験が出来た。楽譜に向き合う時間が延びて曲の細部にわたって目を向けるようになった。人の前で自分の演奏を発表することに少しずつ慣れてきて、自分の演奏が少しは思い切って出来るようになった。皆の意見を聞き知識を増やし、皆で練習法を考え、自分一人では思いつかなかった事や視点を持つことが出来た。知識が足りない部分があるので先生からのアドバイスがもう少し欲しい。自分で分析などを通して知識を頭に入れることも大切だと思うので、自分自身も勉強していこうと思う。(Y.H.)」

「遅いテンポで自分の手、指を見ながら弾く練

習を行った。グループのメンバーの演奏を聞くうちに自分と他のメンバーとの技術の差が見えてきて、ピアノ初心者の私が他の人に意見を言っていいのか、どういった意見を出せば正解なのかという疑問を感じるようになった。調判定や、カデンツ、和声分析など自分が分かる範囲で分析を行っていった。自分にはない知識を補い合うことができた。また、自分と他のメンバーとの比較をしてしまい、自分のレベルの低さ、上達の遅さなどを感じてしまい、自信を持つことが難しくなった。自ら考え、生きる力を養うという目的を考えると、由記音先生からのアドバイスの量や内容は適当だったと感じられる。自分たちには無い知識や奏法を伝授して頂いたり、グループの間違った意見を正して下さったりと、学生だけではどうしても出てこない意見をくれた。そのアドバイスも少しヒントを与えるだけのようなものが多く、自分たちで考えるためのアドバイスだった。(A.K.)」

「背中と腕を使って弾き、曲の分析をして、自分の演奏に活かすことを目標とした。

自分の弾いているときと上原先生が弾いているときをビデオに撮って見比べ、自分がどういう姿勢をしていたかが分かったので、改善しようと意識できるようになった。

後期の前半では 4 人で協力して 3 曲の分析をした。他者の演奏を聴くことで、自分のレパートリーを増やすことに繋がった。相手への自分の意見の伝え方に気を付け、否定的な意見だけではなく、相手の良いところを沢山見つけられるようになった。自分で考えて動けるようになった。(M.T.)」

「前期は自分の納得のいく演奏があまりできなかった期間が長くつらかった。伴奏は主役であるソリストに合わせることも大事だが自分のやりたい演奏をみせることも大切だということだ。勿論自分のやるべきこともあるのでうまく両立することを目標にしていきたい。ピアノソロで立つ日までに活かせるよう場数もこなすつもりで自分を追い込みすぎないよう楽しさを忘れずにしたいと思う。(R.T.)」

「自分の課題点はみんなの意見から発見することができ、自分では見えなかった自らの課題点をも発見することができた。グループレッスンでは自分で分析していかなければならなかったので、最初の頃はとても苦労した。音楽の仕組みを自分で理解できる力を身に着けていきたい。分析をもとにその曲の部分部分が持つ感情をイメージし、その根拠をもとに自分なりの理解をもって演奏することができた。グループレッスンで意見を交わしあうことで自分の演奏の客観的な意見を得ることができた。相手のことを考えて、自分の意見を伝える力が身についたと思う。今まで個人レッスンで先生から奏法や表情を指導して頂いていたので、今のように自分で分析を行い、その根拠をもとに曲の表情を考えるということはこのグループレッスンで学んだことである。今まで個人レッスンの先生に頼りきっていた分、「ラフマニノフ　プレリュード Op.32　No.12」を履修した際は自分で表現したいことを導かなければならず、とても苦しかった。自分で曲と向き合い、分析し、様々な演奏家の演奏を聴き、自分の音を録音するなどして自分自身で成長できるよう、努力を積み重ねたい。(Y.S.)」

「楽譜に忠実になり、自分の演奏を客観的に聴き、楽譜やプロのピアニストの演奏と比べてどうなのか、どのように改善できるのかを自分で考え、実践することも目標であった。

鏡や自分の演奏姿を録画し見直すことで、だんだん身体の使い方が分かるようになった。自分の演奏を録音することで、客観的に聴くことができ、音の厚みが少し分かるようになった。また、自分の演奏をきちんと聴くことで、他の人の演奏との違いが格段に分かるようになり、楽譜に忠実に自分で考えて音楽を表現することができた。

自分たちで曲の分析を行ったが、これでいいのか、当たっているのかどうか分からない部分があった。自分が演奏しない曲でも、音楽をきちんと分析し、色々な演奏を聴くことが必要であることに改めて気づいた。身体を自分はどの

ように使っているのかを、鏡を使って確認したが、全く背中が動いておらず、どのように改善したらよいか考えた。

自分の演奏を見直すことができた。他のメンバーの演奏を聴くことができるので、良いところは参考にしようと感じたり、自分ならこのように演奏するかなと考えてみたり、自分の演奏について考える機会が多くなった。自分たちで考えて演奏するようになった（R.T.）」

「自分の曲のみでなく、相手の曲に対する理解や知識を事前に学んでおくことが必要。

自分で得た学びを逐一受けているメンバーと共有することで授業自体をより円滑に進めることができると考えるので、情報共有を重視したい。結果としてどう現れているのかは自分自身判断しかねるところがあるが、まだまだ荒削りな部分が目立つため細部にも注目できる様、調べ、試聴しといった活動を続けて行きたい。(Y.T.)」

「連弾をするようになったので、練習の仕方や自分の演奏の課題を普段の練習で教えてもらうことができ、とても勉強になった。自分自身で工夫を考えるようになった。CD の音源を聴くことや、作曲者や歴史的背景などの関連する内容を調べた。クラスのメンバーで試行錯誤した経験こそが大きな学びになった。自分で練習するだけでは気づけないことが多くあった（H.N.）」

「自分の世界観や、先生の教えをもとに曲を弾いていたが、この授業内では自分たちで演奏家の方の演奏を聞いて「もっとこうしたほうがいい」という意見を出し合って曲を作っていくので、今までの自分では思いつかなかった意見もたくさんあり、とても勉強になった。(H.K.)」

「自分だけではできなかった新たな発見をすることもできた。グループレッスンの中では、自分たちで試行錯誤する必要があったため、次のレッスンまでにはこうしようという具体的な目標を立てることができた。自分で考える力がついたと感じる。(A.M)」

自らの学びへの戸惑い

アクティブ・ラーニングに対して戸惑う学生も何人かいた。それは、楽曲を考えて弾くことの重要性より、教員に弾き方を教わって曲を完成させ、レパートリーを増やしたいと希望する気持ちからおきる戸惑いのようであった。また同時に、演奏するために作品分析が大変重要であることを感じていないこと、またその重要な分析を自分で行うのではなく、教員から分析結果を教わりたいようだった。分析をしないことは、日本語の言葉の意味を知らずに“あいうえお５５音”を、口を単にパクパク動かしているのと同じである、という説明をしたが、それは理解しても、分析できる作品が現在の自分の水準であるということには納得ができない様子であった。今まで、自分で分析しなくても教員の指示により弾いていた自分を振り返り、前のような難しい作品が弾けない事に納得がいかない様子であった。また、分析を和声分析だけ行い、不必要なほど和声を探り壁にぶつかっている学生が何人もいた。大学では音楽理論等の専門授業があるため、筆者は、学生たちは当然分析ができるであろうと思っていたのであるが、授業で学んでいても身についていないことが判明した。それぞれの作品を分析することで、その作品の素晴らしさが判り、その分析から作曲家の意図が見え、それを表現するためにどのように弾くのがよいかという工夫が生まれ、益々面白くなっていく。本来、このようなアプローチはピアノを弾き始める初歩の段階から、指を動かすことと並行して身につけなければいけない。それをやらずに指だけ動かして、まさに 55 音の口パクをやってきてしまった学生たちへの説明は簡単に理解してもらえるものではなかった。

難易度の高い作品を手掛けて、分析が追いついていない状況が読み取れるレポートがある。下記のペアとは連弾を行っているプリモ（第 1 ピアノ）、セコンド（第 2 ピアノ）を指す。

「まだまだ自分たちの曲の分析に必死になりすぎて、他のペアの曲のプロの方が演奏している

演奏は聴いても、こまかい曲の分析までは至ることができなかったということが、これまでの2年後期の反省点。今の授業では、2曲見せることが精いっぱいで1曲だけで自分の時間が終わってしまうこともたくさん出てくるので、練習曲を普段から練習する習慣が以前に比べて格段に下がっていることが現状。自分たちで考え知恵を出し合って、解決していくことは大切だが、学生だけではどうしようもできないこともあったり、学生だけでの意見では教授の指摘に比べたら、あまり上の話をすることができなかったりするので、1年のころの個人レッスンの時に比べたら、1曲が仕上がるスピードがかなり減ったと思う。(H.K)」

「自分の曲のみを学ぶだけでも苦労した。時間をとれるように工夫をしたが、他の教科の模擬授業やレポート提出が重なった時期は自分の演奏する曲だけで精いっぱい。自分の曲だけでなく、他の人の曲まで音源をよく聴かなければ授業が成り立たないことは、身をもって実感しるが、このような時期には、どんなに頑張っても難しかった。(H.K)」

また、自ら学ぶことに自信がないと思われる状況を目にすることがあり、教員または仲間の答えで安心したいという状況が見えた。周りからの意見にヒントを得て、自ら回答を探すべきであるのに、「できていた？これでいい？」と仲間に答えを求める姿が見られることもあった。

「自分の意見に対して自信が持てず、本当にこんな意見で相手の役に立つのかと不安に思った。グループレッスンの中で指摘されたことをその場で実践することで、自分1人で練習するだけではこれでできているのかと悩むところも、先生や仲間から「今のできていたよ。」というような言葉をもらうことで、こういうことかと気がつくことができた。(A.M)」

また、互いに厳しい態度で授業に臨む気持ちがゆるみ、準備不足を許しあってしまうケース、忙しいという理由でやるべき課題を行わず、仲間の演奏する作品について知識がなく、安易に感想を述べるだけに終わるクラスもあった。自分達で、研鑽する厳しさを持たなくなり、緊張感を緩めることになってしまった。他の授業、またアルバイトに費やす労働時間などを考慮して、勉学に向ける時間の確保について、まさに自己管理できる事こそアクティブ・ラーニングによって育まれるのではないだろうか。

「自分たちの世界観だけで話していることがとても多かった。(Y.T.)」

「自分一人だけではなく、友人たちも一緒、という安心感があったのか、個人レッスンのときより、緊張感がなかったように思う。(K.I)」

「グループのメンバーの人数分、色々な考えがあり、それを自分の中で処理していくうちに自分の考えが広く、視野も多様になった。その反面、音楽の表現（表情のつけ方）についても1人ひとり意見が違い、自分が創りたい、表現したい音楽が分からなくなることがあった。自分たちでできていない所を指摘し合い、改善法や練習法を考えてやってきたが、分からないことの方が多かった。(A.K.)」

これらの状況を見て、リフレクション・シートを記入させることにした。これについては別項で述べる。

アクティブ・ラーニングによる卒業研究

次に、卒業研究でのアクティブ・ラーニングについて述べる。

2016年卒業の学生は、筆者が大学着任した時に一緒に入学してきた学生たちであり、3年次まで通常のマンツーマン・レッスン、2017年卒業生は、2年次までマンツーマン・レッスンであり、それまではアクティブ・ラーニングではなく筆者が弾き方を教えるという形態であった。最後の1，2年をアクティブ・ラーニングで行った。

研究方法

4年次での研究達成目標は下記とした。

・その作曲家の時代背景、作曲家・作品についての調査
・作品の分析
・エディションの比較
・演奏の比較聴取（分析を基に判断した理想的な演奏の調査）
・自身の演奏について問題提起と解決法を模索し、実践方法のヴァリエーションを増やし、高い完成度をめざす。その結果から作品の表現に適した奏法と自分に合った練習方法を纏める。

歴史的な流れ、作曲家についての研究は早い時期に行わせ、学生から提出されたレポートについて矛盾点や中途半端な調べに対しての指摘を授業ごとに行い、繰り返し書き直させる作業を行った。

分析と演奏の比較調査は、授業を進めていくうちに、学生が工夫して作ったノートが有効であると思われ、皆が同じようにノートを作るようになった。これは大きなスケッチブックの左側に楽譜をコピーしたものを張り、右側のページに気が付いたことを書きこむものである。楽譜に分析を書き込み、演奏家の比較調査を行い、それぞれのピアニストの演奏を色分けして、カラーペンでそれぞれの演奏の特徴を細かく左の楽譜と右のページを利用してまとめていく。比較調査の対象は世界的に評価を受けているピアニストとし、このピアニストを選ぶ作業も「学び」の一部とした。前にも述べたように、教員が、聴くべき演奏家や読むべき参考文献を指定してしまうと、雑多な世界の中から、重要なものを抽出するための方策を知らずに終わることになる。学生には、この作業にも意味があること説明し、学生に行わせ、問題がある場合のみ、指摘をした。

分析をした後に、その結果を演奏に結びつけることが最初は難しかったが、教員からは「問いかけ」を行い、教員が結果を導くのではなく、学生に考えさせる作業を繰り返すようにした。次には自分の演奏の録音を詳細にわたりチェックさせ、世界的ピアニストとの違いを詳らかにし、自分の理想に近づくための練習方法の工夫をさせた。既に3年間は色々な楽曲を弾いてきており、或る程度自分たちで工夫は出来るものの、教員から高度な練習方法の提案をすることがあった。比較聴取は生演奏でなくCDで行っているため、音量や音質については、目の前で実際に音を鳴らし、どのぐらいの音量が必要か、腰の使い方、腕や肘の使い方、手首や手の甲、指先の細かな使い方の変化でどのように音色が変わるか等、CDや本では判らない音に関しての情報は筆者が学生たちの目の前で見せる必要があった。他の学生への指導と同様に、あくまでも筆者の示したものが理想ではなく、一つの意見として捉えること、もっと色々な可能性を探求していくことを指導した。

研究室で、学生は研究の進捗度を報告し、対処したうえで自分が処理できない問題点を教員に相談する授業形態を取った。学生の工夫に見落としや、経験豊富なキャリアでこそ知りえるコツもあるので、学生の努力が見られ、それでも不足する場合には、教員から解決策を提示した。

2016年3月に、4年次はベートーヴェン作曲ピアノソナタ第23番　ヘ短調　作品57「熱情」第3楽章、モーツァルト作曲「ピアノソナタ第14番」ハ短調K.457　第1、3楽章、ショパン作曲「ノクターン第7番」作品27－1嬰ハ短調、「ポロネーズ第1番」作品26－1嬰ハ短調、ドビュッシー作曲「前奏曲集第1巻」より「帆」「ミンストレル」「西風の見たもの」を、2017年3月にはドビュッシー作曲「版画」より「パゴダ」「グラナダの夕べ」「雨の庭」を研究し演奏発表した。現在2018年にはプロコフィエフ作曲「ソナタ2番」第4楽章を発表予定で、全員がとても質の高い研究と演奏ができたと感じている。

以下は、卒業生の記述であるが、「先生に言われてではなく、自分自身で違いに気づき大きな自信がもてた」「自分自身でできたという自信」という言葉が印象的である。

「ピアノのレッスンに関して、「自分自身が主体になる」ことは初めての取り組みだった。

自分自身がどのように演奏したのかをイメージしてレッスンに挑まなければならなくなった。「自分自身で考える」場面がとても多くなった。プロの演奏家の CD と自分の演奏を聴き比べたり、同じ曲の楽譜を複数購入し、それぞれの出版社ごとにどこが違うのかを比較検討したりした。CD を聴く際は、複数の演奏家の CD を聴くことで、同じ楽曲であってもそれぞれの演奏の仕方に違いがあり、それを何度も聴いて自分の気に入った奏法を取り入れるようにした。その中でも、最も効果的だったことは、練習の際に録音をして自分自身の演奏を客観的に聴き、プロのピアニストと比較すること。始めたばかりのころは、自分の演奏の録音は耳が痛く、聴くことが大変だったが、繰り返すことで、理想の演奏に近づいていくのを感じ、やりがいを感じた。自分の演奏を録音して、プロの演奏家と聴き比べてみることで、自分ができていない部分や表現が足りていない部分を客観的に把握することができた。第 1 曲と第 3 曲を自分の力で仕上げることができたということが自信になり、第 2 曲目を含めた 3 曲すべてを演奏することを決意した。

アクティブ・ラーニングのレッスンを受ける前の自分であれば、レッスン回数が少ない中で、新しい曲に取り掛かることはとても不安だったと思う。

スペインの独特のリズム感など、CD を聴いて、自分の演奏と比べてみないと分からないような歌いまわしなどが多くあった。そこで、先生に言われてではなく、自分自身で違いに気づいて、演奏に反映できたことは大きな自信につながった。

本番で自分がどんな弾き方をしたいかを人の前で、自信をもって表に出すことができるようになった

いままで・・自分自身がどのように演奏したいのか、考えているようであまり分かっていなかった。

人に言われてできるようになるのではなく、自らが気づき、頭で考え、自分の意思で練習することが大切であるということに気が付くことができたのは、自分の中でとても大きなことだったと思う。(K.M.)」

「自分なりに考えながら練習することをした。自分で何度も繰り返したり、音源を聴いたりしていると、「ここはこうしたほうが良いな」というのが自分でわかるようになってきた実感があった。無駄に手が動いていることには自分では気が付いていなかったので、そのようなところにも気を付けられるよう、曲の盛り上がるところで冷静さを保つことも私には必要なのではないかとも考えた。自分で曲を完成させていく力を少しは身につけることができたのではないかと思う。授業までに自分なりに考えて工夫してみなければならないため、私は、毎回の授業に具体的な目標があり、授業のたびに、曲が完成に近づくのを実感した。自分で、具体的にどうしたら良いのかを考えることにつながった。自分で考えたことにより、その曲だけでなく、他の曲にも応用することができたとも感じた。(N.O)」

試行２年目における変更事項

厳しさを欠いて、互いに安易な状況に陥るクラスの情況を整えるために、アクティブ・ラーニング 2 年目は、毎月、リフレクション・シートで演奏に関わる色々な側面をチェックさせるようにした。項目は 30 あり、毎月、自分でそれをチェックし、筆者にシートを提出し、捺印を受ける。

このシートの内容は、脱力はできているか？楽語の意味は調べたか？作品分析をしたか？作曲家について調べたか？などの問いかけが並んでいる。毎月チェックしていれば、音楽に向き合った時に気付きを見落とさないようにする癖をつけられるように、との思いで筆者が作った。現在試行 7 ヶ月経過の情況である為、リフレクション・シートの効果についてはまだ検証できていない。

分析力を高めるために、2 年目より演奏する楽譜に直接分析を書きこませ、弾く前に筆者に

提出させ、テーマの抽出、展開、構成などを含めて楽曲分析をチェックするようにした。新1年次には実技の授業を始める前の4月の段階で、ベートーヴェンのソナタやバッハのインヴェンションの分析の参考書を基に、分析の行い方を学ばせた。これにより分析への理解度も良くなり、その分析を表現に結びつけるための技術の目的を明確にすることができ、分析が表現の裏付けになることを学生たちが確認できるようになった。

試行2年目における学生の自己評価

本年度入学の学生のレポートをここに転載する。この学生は高校生までピアノの指導を受けてきている学生で中専として在学し、2018年4月入学時から7月までの学習について述べている。

「〈グループ授業で得たもの〉

グループでのレッスンなので、様々な視点から自分自身の演奏を見てもらうことができ、演奏の良い面も悪い面も、今まで気が付かなかったことに気付くことが出来た。

演奏した人に対してアドバイスを必ず言うので、相手が傷つかないような言い回しを意識して話すようになった。

アドバイスをする際、相手に伝わりやすいように喋ることの大切さや難しさを知ることが出来た。

ほかの人の曲に対してアドバイスをするので、以前と比べて曲を聴く機会や回数が増えた。

授業の流れを学生自身で作っていくので積極的に発言していく大切さを改めて学んだ。

授業の雰囲気をよくするために、演奏が終わったら拍手をしたりするなどの思いやりを持つことの大切さも学んだ。

今までのマンツーマンのレッスンでは、正直、楽曲分析はほぼ先生がおっしゃったことを書き留める。程度でしかなかったが、今はしっかり自分で分析した後で演奏するようになった。また、そのおかげで、より曲への理解が深まり、表現につながった。

グループ授業では自分で曲を進めていくので、計画的に進めていけるよう、練習の日程や内容を以前にも増してきちんと考えるようになった。また、自分に足りてないものが何なのかをより意識して練習に取り組むようになった。

誰か一人の言葉にそのまま従うのではなく、周りのアドバイスを受けて自分なりに解釈するよう心がけるようになった。

ある特定の一曲でも、その人それぞれの表現の仕方があるということを知れて、その曲に対する自分のイメージに幅が広がった。

〈グループ授業で失ったもの〉

グループ授業を通して失ったものは今のところ無いと感じているので、この方式で授業を実際にやってみる前に不安だと思っていたことを書きます。

先生とのマンツーマン・レッスンではないため、演奏技術をアップさせるための練習がちゃんとできるのか不安だった。

→実際、グループ授業では様々な観点からの意見があって、今まで気が付かなかった自分の弱点にも気づくことが出来たし、弱点克服のための練習方法についてもみんなで話し合いながら進めていけるので、練習法のアイディアもたくさん得ることが出来た。

〈前期授業での履修曲目〉

- *ツェルニー30番の30*
- *ツェルニー40番の1～5*
- *バッハ　インヴェンションの1～4*
- *ベートーヴェン　ピアノソナタ1　Op.2-1*
- *ショパン　即興曲1番　Op29(M.M.)」*

まとめ

作品分析と曲作りについては、ある程度学生達だけの努力で完成することができるが、音色や音量については、録音を聴いても実際に目の前で鳴っている響きとは異なる。東京であれば生演奏を聴く機会は多いが、沖縄という地域で生演奏を聴取するのは、安易なことではない。そのために筆者が学生の目の前でピアノを弾いて見せ、生の音を聞かせることが必要であった。教えるということではなく、実際に近くで見聞

きして、そこからそれぞれが自ら感じ、何かを受け留め、次のステップへと進んでいく材料にすると良いため、今後も生演奏実演は必要と考えるようになった。

指導者から細部にわたり指導を受けることは、確かに演奏の完成度は高くなると思うが、本人の耳を育てること、本人の感性、音楽の理解を深めていることにはならない。美しい音を聴いて自分の耳を育て、自分自身の音楽に対する美意識を高めなければ、いつになっても、教わらなければ気づかない人間になってしまう。遠回りのようでも、自分で考え自分の耳で確かめられるように成長しなければならない。

音楽を学ぶ学生には、それぞれが高い意識をもって、自分の心と耳と頭脳で、音楽を受けとめられるようになって欲しいと願う。

あとがき

筆者は 2013 年 4 月に当大学に着任し、新入学生と前担当者から引き継いだ 2 年～ 4 年次のピアノ実技の指導を始めた。引き継いだ学生については、少しずつ前任者の指導方法を変えていき、新入学生には 3 年または 4 年間の履修目標を決め、指導を始めた。

高校までに受けてきたレッスン内容と多くの部分で相違があったため、最初は抵抗が多かったものの、最終年次に向かうに従って筆者の指導を一言も逃さず習得しようとする態度が見られた。それは、メモは勿論、録音や動画撮影も行い、大変熱心なものとなった。

しかし中央教育審議会答申を受ける以前より、筆者は管理されて成長するのではなく、自分自身、自らの考えで成長をしたいと考えていた。子供はもちろん、学生を育てるときも、管理するのではなく自分の力で考え行動できる人を育てたいと考え実行していた。学生たちは大変熱心であったが、筆者の演奏法を直伝しているような状況になってしまい、それはまるでクローン・ピアニストを作るようであった。ある日から「もう、やめましょう。自分で考えましょう。」と言ってこのアクティブ・ラーニングを始めたが、学生たちは一人も文句を言わず、一生懸命自分の音楽を追い求めて、皆、素晴らしい演奏をしてくれた。これは筆者には大変な喜びであった。学生諸君にありがとうの言葉を伝えたい。